

# ヒュームはホッブズから何を受け継いだのか ——革命と啓蒙の時代において開花する哲学的概念——

竹中 久留美

## 序

18 世紀という安定と発展の時代のスコットランドに生まれ同じ世紀内で生涯を終えたヒュームは、度重なる混乱の時代である 17 世紀のイングランドに生きたホッブズから何を受け継いでいるだろうか。それは、想像の理論であり、延いてはその自由さと言えるのではないか。ヒュームにおいては、この想像の働きは知性の中心的機能であり、もっとも自由なものである。彼らにとって、人間の想像は、自由を保証するものであり、それがゆえに革命やそれからの社会形成において、また人間が生きる上で最も重要なものであったのではないかと想定することは自然だろう。

これについて、本論ではまず、ホッブズが生きた時代、すなわち 17 世紀イングランドに起きた革命や、それに伴うホッブズ自身の活動を通して彼の哲学を概観する。そして次に、18 世紀初頭にグレート・ブリテン王国としてイングランドと合同したスコットランドで展開された、いわゆるスコットランド啓蒙、中でも大学改革に関する歴史的事情と、ちょうどその改革された直後に大学へと入学し、その後哲学へと傾倒したヒュームの主張をまとめる。その上で、彼らの哲学での共通点を炙り出していく。

## 1. イングランド革命<sup>1</sup>とホッブズ

17 世紀イングランドでは、二つの革命が起きた。ピューリタン革命（あるいは市民革命）と名誉革命である。前者の期間は諸説あるが、一般に 1642 年に始まるとされ、終わりとしては 1649 年チャールズ 1 世の処刑で区切りをつけることができるであろう。その後、オリバーとリチャード・クロムウェル父子による共和制の時代へとなり、1660 年の王政復古につながる。後者は、1688 年後半から翌年 1689 年の前半までの数か月間で生じたものだ。ジェイムズ 2 世が追放され、ウィリアム 3 世とメアリー 2 世の共同統治が始まり、それにより、1701 年の王位からカトリック教徒を完全に排除する王位継承法制定へとつながる。

これら二つの革命の大きな違いは、前者とは大きく異なり、後者が無血革命であったことだと言えよう。歴史的には、この二革命は、共和制をはさむ別の革命と記述されるが、現代のイギリス（あるいはイギリス王室）を築くことになった出来事という意味では、一つの大きな混乱期とみなせる。17 世紀のこういった社会的混乱は、イングランドに限ったことではない。フランスでは三十年戦争、オランダでも独立戦争が起きた。これらは、単に社会的混乱というよりは、宗教改革に伴う戦争であったと言ってよい。16 世紀に起きた宗教改革の波が、17 世紀に社会の変革を目指すものへとつながったと言える。

これと同様のことが、同時期のイングランドでも起きたとみることができる。ただし、イングランドの宗教改革は、他国の宗教改革のようにルターやカルヴァンによるものではなく、イングランド国王によって引き起こされた<sup>2</sup>。ヘンリー 8 世は、妻キャサリン・オブ・アラゴンとの離婚を望んだことから、1533 年にカトリック教会から破門された。けれども、ヘンリー 8 世は、翌 1534 年に国王至上法を議会に提出し、イングランドでの教会はトップに国王を据えるということを議会が認めたことにより、イングランドの教会をカトリックから離脱させた。教皇から国王への権限の移行、これがイングランドでの宗教改革である。

ヘンリー 8 世以降の国王は、イングランド教会の首長となることになるのだが、イングランドでの宗教改革の核が「教皇から国王への権限の移行」であるため、儀式的作法なども含めて、イングランド教会はカト

リックに近似し、また、いわば政治的宗教改革ともいえるためか、たびたびカトリック信者、ないしは親カトリックの者が王位に就くことになる。それは、ヘンリー8世の娘であり、父により離婚に追い込まれたキャサリン・オブ・アラゴンの娘であるメアリー1世と、ステュアート朝のチャールズ1世やチャールズ2世、そしてジェイムズ2世であった。また、チャールズ1世の父ジェイムズ1世<sup>3</sup>の母はメアリー・ステュアートであり、カトリック信者であった。

メアリー1世は、ヘンリー8世の死から6年後であり、父母の離婚、すなわち父のカトリック破門から20年後である1553年にイングランド国王に即位した。彼女は、父の宗教改革を否定し、カトリックに復帰する。この際は、カトリックを離れてそれほど経っていなかったこともあり、当初は大きな反発が起きなかった。ただ、プロテスタントを迫害し殺害したこともあり、のちにメアリー1世はしばしば否定的に評されることになる。

ステュアート朝のチャールズ1世やチャールズ2世は、イングランド教会を支持していたが、チャールズ1世の妻はフランスからカトリック信者であるヘンリエッタ・マリアを迎える。そして、その二人の間にのちのチャールズ2世が生まれる。チャールズ1世がカトリック信者を妻に迎えたことは、大きな反感を買うことになる。そして、ピューリタン革命期にチャールズ1世は、妻の母国であるフランスに子と共に亡命させる。そして、その亡命宮廷で、子であるチャールズに数学の家庭教師として迎えられたのがトマス・ホッブズであった。

トマス・ホッブズは、1588年に生まれ1679年に91歳で没する。歴史的出来事と照らし合わせるなら、スペイン無敵艦隊によるアルマダ海戦の開戦の直前に生まれ、名誉革命の約10年前に生涯を終えている。その間、イングランドは、エリザベス1世、ジェイムズ1世、チャールズ1世、オリバー&リチャード・クロムウェル、チャールズ2世によって統治された。ホッブズは、1620年前後<sup>4</sup>にフランシス・ベーコンのもとで口述筆記するなど秘書として働いた。また、フランス亡命中には、パリにあった亡命宮廷でのちのチャールズ2世に仕えたが、1651年に『リヴァイアサン *Leviathan*』（英語版）がロンドンで出版されると、無神論者とみなされ、そのことにより亡命宮廷から出入りを禁止される。パリにいたことが出来なくなったホッブズは、イングランドに帰国、共和制政権に帰順する。その後、批判を逃れるために表舞台を避けていたが、無神論者との評価が減ずるところかいよいよ増してしまった<sup>5</sup>。そして、王政復古後の1666年にはチャールズ2世に政治・宗教関連の著作の出版を禁じられる。ただ、ホッブズは、いずれの時期でも著作や翻訳活動をやることはなかった。

ホッブズにとって、『リヴァイアサン』は良くも悪くも主著とみなすことができよう。『リヴァイアサン』は、彼が無神論者とみなされる決定打となった。確かに、ホッブズは、イングランド教会での下級聖職者の息子として生まれたが、彼が12歳の頃<sup>6</sup>に傷害事件を起こした父が行方不明となり、伯父に引き取られていたので、家庭内の宗教的影響はそれほど強くはなかったかもしれない。イングランド教会の洗礼を受けたのも1647年、ホッブズが59歳の頃であった。とは言え、この洗礼も、彼が大病を患い、死を意識した故のこととみなされている。彼が無神論者であったか否かは、どの文脈でホッブズを理解するかで別れるのではないと思われる。少なくとも、『リヴァイアサン』でホッブズは、「国家」を「リヴァイアサン」という海獣になぞらえ、それを「神」の立場に位置づけた。そして、その「神」に対して市民が服従することにより、安定した社会が形成できるとしたのである。このことは、ホッブズにとって、政治的にも宗教的にも地域的にも対立の激しくなっていた、ピューリタン革命期にこそ探究され、著されるべきものであったのかもしれない。

## 2. スコットランド啓蒙とヒューム

イングランドでは、1688年にイングランドからジェイムズ2世が追放され、翌年メアリー2世とウィリアム3世が国王に即位した、いわゆる名誉革命が起きた。こののち、アンが国王に就いていた1707年に、

スコットランドはイングランドと合同<sup>7</sup>することになる。ここから、いわばスコットランドのイングランド化が始まる、つまり、ウェストミンスターでの議会に議席が与えられたとは言え、スコットランド議会がイングランド議会に吸収されてしまった。また、言語としての英語の流入が本格化したともいえるだろう。とは言え、北方の小国であったスコットランドにとっては、イングランドの経済的恩恵は、特に大きかった。最も顕著な例は、植民地時代のアメリカとの貿易港としてグラスゴーが栄えたことである。グラスゴーは、ヨーロッパでのタバコ貿易の中心地となった。それと同時に、グラスゴー大学を中心とした経済学の誕生と発展が見て取れる。当時のグラスゴー大学の出身者だけでも、フランシス・ハチスンとアダム・スミスがおり、蒸気機関改良者であるジェイムズ・ワットも、いわば大学職員のような身分で在籍していた。彼らがグラスゴー大学に関わっていたのは偶然かもしれないが、グラスゴーが商業都市としての発展したのと相乗的に経済学が発展した裏には、グラスゴー大学での大学改革が大きく関わっていると考えられる。

そしてまた、グラスゴーが商業都市として発展し、グラスゴー大学が経済学を発展させた一方で、エディンバラは学術都市として発展を遂げた。その中心は、エディンバラ大学に他ならない。この学術都市としての発展の核にあるのは、やはりカリキュラム刷新を基とする大学改革である。この大学改革は、イングランドの2大学に大きく先駆けて、スコットランドの4大学において18世紀前半にわたって順次行われていった<sup>8</sup>。その先駆けとなったのがエディンバラ大学である。この大学改革での主要なポイントは、それまでのスコットランドの大学では、独特な教師制をとっていたが、この制度を廃止して、オランダの大学ですで行われていた専門教授制度を導入したこと、つまりカリキュラムを大改編したことである。これはウィリアム・カーステアズ William Carstares/ Carstaires (1649–1715)によってもたらされた。

ウィリアム・カーステアズは、1703年にエディンバラ大学の学長に就任する。それに伴い、オランダの大学制度<sup>9</sup>にならい、1708年にエディンバラ大学のカリキュラム改編に着手した。カーステアズ自身、オランダに亡命したことがあり、オランダの事情を知ることができる立場にあった。その際に、のちのイングランド王ウィリアム3世とも知り合い、懇意にしていたとされる。カーステアズは、長老派の牧師であり指導者であった。彼は、1683年のライハウス陰謀事件 Rye House Plot<sup>10</sup>に関わっており、処罰されたとされる。ライハウス陰謀事件とは、王位における反カトリックという名目で行われようとした、時の国王チャールズ2世と、その弟でありのちの国王ジェイムズ2世の暗殺未遂事件である。この事件は未遂に終わったものの、その5年後の名誉革命によって、カトリック信者が王位に就くことはなくなった。

カーステアズは、オランダ初期啓蒙をスコットランドに導入したことになる。そして、それによるエディンバラ大学の改革に他3大学、グラスゴー大学、セント・アンドルーズ大学、アバディーン大学が続き、結果的にスコットランドが学術的に他ヨーロッパ諸国に引けを取らないレベルに達したのである。その中でも、エディンバラ大学が「北のアテネ」と呼ばれるほどに発展し、イングランドやアイルランドだけでなく、フランスなど大陸からも学生が来るようになったのは、スコットランドでも比較的南部にあったという地理的条件だけでなく、やはりエディンバラ大学の改革が早い段階から行われたためでもあると言えよう。

エディンバラ大学に遅れること約20年、グラスゴー大学の大学改革は1727年に始まる。グラスゴーが商業都市として発展したのは上述の通りであるが、それと相乗的にグラスゴー大学でのちに古典経済学が成立することになる流れが作られる。グラスゴー大学の初代の道徳哲学講座教授に就任したのは、ガーショム・カーマイケル Gershom Carmichael/ Carmichael (1672–1729)である。彼のもっとも大きな功績は、サミュエル・フォン・プーフENDORF (1632–94)をスコットランドの大学でテキストとして扱ったことだとされる。カーマイケルが教授職に就いていたのは、1727年から1729年までであるが、その後同教授職には、カーマイケルを師とするフランシス・ハチスンが1729年から1746年まで務めていた。そして、1人はさみ、ハチスンを師とするアダム・スミスが1752年から1764年まで従事する。さらにそのあとには、トマス・リードが1764年から1796年まで就いていた。

このグラスゴー大学の道徳哲学講座の中でも、ハチスンとスミスの講座は大変人気があり、様々な地域から学生が集まった<sup>11</sup>とされる。また、スミスが道徳哲学講座教授時代にワットが働いていた。経済学の歴史

から見ると、スコットランド啓蒙の時期を、この流れからスミスを中心として、スミスのグラスゴー大学在任時からの20年前後と定義できるのかもしれないが、哲学の歴史としては、グラスゴー大学の発展の一方をもたらすことになる大学改革の始まり、あるいはその準備段階、すなわちカーステアズの活動から捉えてもよいのではないだろうか。いずれにしても、エディンバラ大学での大学改革がきっかけになっていることは間違いないと言えるだろう。

そのように1708年に大学改革を始めたエディンバラ大学に、デイヴィッド・ヒュームは1723年に兄とともに入学する。ヒュームの時代に、エディンバラ大学で誰が教えていたのかは、部分的には分かっているが、何が教えられていたのかについて、ヒューム自身が書き残しているものは少ない。「ヴォエトやヴィンニウス<sup>1213</sup>」という名前は上がっているが、それらについてはヒューム自身がそれほどの関心を抱けなかったとして出されている名前である。また、同様の法学者であるグロティウスやプーフENDORFについては、前者は1739年以降の書簡で1回（ハチスン宛）と1751年の『道徳原理研究 *An Enquiry concerning the Principles of Morals*』で1回名が挙がっており、後者については、同ハチスン宛書簡で1回名が挙がっている。いずれの場合も、比較的后年、少なくとも『人間本性論 *A Treatise of Human Nature*』第1・2巻出版以降のことであるので、大学では教わらなかった可能性が高いし、もし大学で教わったとしても、ほとんど関心を持たなかったのではないだろうか。少なくとも、大学でヒュームが関心を持ったのが法学でなかったのは、ヒューム自身の言葉からも分かる。

### 3. ヒュームとホッブズ

ではヒュームは何に関心を持ったのかと言えば、文学あるいは哲学であった<sup>14</sup>。彼の哲学は、用語法などの歴史的系列からすると、デカルトやロックのあとに続くものであるが、ヒューム認識論そのものの根幹部分は、ロックよりもホッブズに近い<sup>15</sup>。また、「ヒュームの「観念」はロックやバークリが継承したデカルト的「観念」の系譜ではなく、ホッブズの「心像 *phantasm*」の系列に属する<sup>16</sup>」という黒田の指摘もある。ロックやバークリの「観念 *idea*」がデカルトの「観念」と同じかどうかはここでは問題にしない。だが、「ホッブズの「心像 *phantasm*」の系列に属する」とは言えるだろう。このことは「想像 *imagination*」の議論で顕著になり、ほぼ同様のことが言われていることが分かる。

ヒュームは、『人間本性論』第一巻第一部第三節「記憶と想像の観念について」において、どんな印象も心に現れる時には観念として現れ、そして、その現れ方には二通りあるという。つまり、「その新たな出現において最初の活気のかかなりの程度を失わずに印象と観念との中間のようなものの場合と、その活気を全く失って完全な観念である場合<sup>17</sup>」の二通りである。前者は「記憶 *memory*」、後者は「想像 *imagination*」とされる。これらは活気の違いによって説明されるのみだが、ヒュームにおいてはこの想像の活気のなさが重要な点となる。というのは、記憶、想像のどちらも印象に由来する観念であるが、後者は「もとの印象と同じ順序、形式に拘束されない<sup>18</sup>」のであるが、それは活気が弱まっているからであり、それにより、より自由な観念の置き換えが可能となるのである。

この想像という語については、ホッブズも論じている。そこに、ヒュームの用語や定義に類似をみることができる。ホッブズは、『リヴァイアサン』第二章「想像について *Of Imagination*」において、「対象が取り除かれたり目が閉じられたりしたあとも、私たちはなお、見られたものの像を、私たちが見ているときよりもあいまいではあるけれども、保持する<sup>19</sup>」とする。そして、そのような像 *image* を、ラテン人は「見ることに於いて作られる *made in seeing*」<sup>20</sup>像から想像と呼び、ギリシア人は空想 *fancy* と呼んで、「現われ *appearance*」を意味するという<sup>21</sup>。そして、この想像は「一度にすべてかあるいは数回にわたって一部ずつか、以前感覚に受け入れられた物事だけについてのものであって、前者（それは対象全体を、それが感覚器官に提示されたように想像することである）は、人が前に見た人間または馬を想像するように、単純想像である。後者は複合されたもので、あるときの人間の姿と他のときの馬の姿から、私たちが心にケンタウルス

を思い描くような場合である<sup>22</sup>」とされる。

ヒュームも、単純と複雑（あるいは複合）の分類を観念に設けるが、それは直接的にはロックに由来すると言える。しかし、ホッブズが「私たちが見ているときよりもあいまい」と言うように、感覚に受け入れられたときとそれが像であるときの間に程度の差を見ている点においては、ヒュームの観念はそれに対応するとみることができる。ヒュームにおいて、想像は「自由に観念を取り換えたり変えたりする<sup>23</sup>」能力によるものである。しかし、「自然が全く混乱する<sup>24</sup>」ことにより、翼のある馬や火を吐くドラゴンなどが思われるということがある。しかし、これらは「私たちの観念すべてが印象から模写されること、そして完全に分離できないどんな二個の印象もないこと<sup>25</sup>」を踏まえれば、「この空想の自由 *this liberty of the fancy*<sup>26</sup>」は不思議ではないとされる。翼のある馬や火を吐くドラゴンの例は、先に挙げたホッブズの一文に出てくるケンタウルスと同様で、ホッブズにおいては複合想像である。ホッブズは「自分をヘラクレスあるいはアレクサンドロスのような人と想像するときのように、（中略）ある人が、彼自身の人格の像と、他の人の諸行為の像とを複合させるとき、それは複合想像であり、正しくは心の虚構にすぎないのである<sup>27</sup>」という。ホッブズにおいては、複合想像という虚構が生じるが、ヒュームにおいては、「自然の混乱」によって虚構された像が想起される。ヒュームにとって、この「自然」にならうことは、観念連合にならうことであると言えるが、これについてはまた別に論じたい。いずれにしても、ホッブズの場合もヒュームの場合も、実際に経験したものではなく、それらを分離して虚構されたものが空想である。言い換えると、恣意的に思われたものが空想であると言える。

ホッブズは、「おとろえつつある感覚 *decaying sense*<sup>28</sup>」を表現するときに想像を使い、「おとろえつつある感覚」の像そのものは空想を使う。ホッブズにとっては、想像が能力あるいは機能でもあるのに対して、空想は像そのもの（現われ）である。ホッブズは「くりかえしていうが、想像はかつて、全部一度にかあるいは一部ずつ数回にわたってか、感覚にうけ入れられたものごと<sup>29</sup>」であると念を押し、想像と空想との差別化を図ろうとする。しかし、ヒュームの用いる "*imagination*" と "*fancy*" に関しては、ノートンは、ヒュームが両者を「互換可能に *interchangeably*<sup>30</sup>」使っているとし、大概もまた「同じ意味<sup>31</sup>」であるとする。これには疑問を呈することができる。それは、上のホッブズの想像と空想の用語法と同様、ヒュームの関係についての議論からも言うことができる。

「関係」という語は、通常互いに著しく異なる二つの意味で使われる。それによって、二つの観念が想像でともに結び付けられ、一方が他方を上記の説明の仕方に従って自然に導くという性質に用いられるか、あるいは、そこでは、空想の二観念の恣意的な合一においてすら、私たちがそれらを比較するのに相応しく思えるという特殊な事情に用いられる。<sup>32</sup>

ここで着目すべきなのは、前者は二観念が想像で結合され、後者の空想は二観念が恣意的に結び付けられることを含んでいる点である。つまり、想像は、二観念を結び付けるには、「自然に導く」、言い換えれば観念連合の原理による場合と、そうでない場合があるのである。この想像と空想の違いは、ホッブズと同様だ。これに従うのであれば、想像と空想とが「互換可能に」は使えないことは明白であろう。

ヒュームは、想像の議論をホッブズにならったのだろうか。ヒュームはホッブズの名に『人間本性論』で2回触れ、一方では『リヴァイアサン』の書名も挙げている<sup>33</sup>。これだけでヒュームが『リヴァイアサン』をすべて読んだとは言い切れないが、『リヴァイアサン』について知っていたのは間違いない。ホッブズによる『リヴァイアサン』第1部の執筆の仕方は、エピクロスの影響と言われている<sup>34</sup>。そしてこのような人間本性の探究に始まり、道徳や社会についての議論へと展開する仕方は、その後のイギリス哲学の構築方法に影響を与えたと言われ<sup>35</sup>、この点については、ヒュームもやはりホッブズとまったく同じ哲学構築の歩みをとる。

そのように、彼らにとって、人間本性の探究から始める必要性は何であったのか。彼らが生きた時代、す

なわちホブズはイングランドの混迷期、ヒュームはスコットランドの発展期であった。時代としては全く異なるように思われるが、一つの社会を築き上げようという最中であったのはいずれも同じである。そのような社会形成において最も必要だったのは、人間の知性における自由であったのではないだろうか。彼らは、神や悪霊に思われるのではない人間の想像の能力を、自然的と恣意的とに分けて探究した。特に恣意的な想像については空想と呼び、経験（知覚）したことのないものを指すという点で共通する。その人の意志が自由であるかは、観察者によって否定的にみなされる、つまり因果的に、あるいは決定論的に捉えられるかもしれない<sup>36</sup>が、その人の思いそのものの自由は否定されえない。混迷期であれ、発展期であれ、人間の想像、思いそのものは、外的な力によって思われるのではなく、その人の能力で思うことのできるものだ、その自由が人間にはそもそも備わっているのだということを表現し主張することが、彼らにとって必要だったのではないだろうか。そのように考えるならば、ヒュームはホブズから受け継いだのは、人間の想像の、思うことそのものの自由であると言えるだろう。

ホブズは政治的宗教的混乱期に生き、ヒュームは学術的経済的発展期に生きた。彼らの時代は全く異なるとも言えるが、どちらも変化の中にいたとみなすことはできる。彼らがなそうとしていたのは、そういった社会的変化においても左右されない人間本性の能力を明らかにすることであったし、その中でも知性における想像の自由を重視していたと言えるだろう。このことは、人間には本来的に自由を有していることを示すことになろう。これについては、いつの時代でも、どのような世の中であっても、想起されるべきことであると考えられる。

## 文献表

以下で略符号のあるものは、本文中で引用したものである。

また、ヒュームの著作については、ヒューム研究者のオックスフォード大学ハートフォード・カレッジの Peter Millican 教授等が作成した WEB サイト”Hume Texts Online”( <https://davidhume.org/> )も参照した。

秋元ひろと (2017). ホブズの形而上学—彼の自然学のまえに置かれ、あとに完成される学問—. 三重大学教育学部研究紀要. 第 68 巻人文科学. pp.21-38.

L/ Thomas Hobbes (2007). *Leviathan*. Richard Tuck (ed.). Cambridge University Press.

トマス・ホブズ (1954). リヴァイアサン(一). (水田洋訳). 岩波書店.

T/ David Hume (2011). *A Treatise of Human Nature*. ed. by David Fate Norton, Mary J. Norton. Oxford University Press.

デイヴィッド・ヒューム (1948). 人性論(一)-(三). (大槻春彦訳). 岩波書店.

デイヴィッド・ヒューム (2011). 人間本性論 第 1 巻知性について. (木曾好能訳). 法政大学出版局.

デイヴィッド・ヒューム (2011). 人間本性論 第 2 巻情念について. (石川徹、中釜浩一、伊勢俊彦訳). 法政大学出版局.

David Hume (2009). *An Enquiry concerning Human Understanding*. ed. by Tom L. Beauchamp. Oxford University Press.

デイヴィッド・ヒューム (2004). 人間知性研究. (斎藤繁雄、一ノ瀬正樹訳). 法政大学出版局.

David Hume (2011). *The Letters of David Hume Volume1:1727-1765*. ed. by John Young Thomson Greig. Oxford University Press.

David Hume (2011). *The Letters of David Hume Volume2:1766-1776*. ed. by John Young Thomson Greig.

Oxford University Press.

David Hume (2011). *New letters of David Hume*. ed. by Raymond Klibansky, Ernest C. Mossner. Oxford University Press

David Hume (1980). *My own life*. Earnest Campbell Mossner. The Life of David Hume, Second edition. Clarendon Press.

池田貞夫 (1982). ホッブズにおける哲学と歴史. 一橋論叢. 88(3). pp.359-375.

神野慧一郎 (1984). ヒューム研究. ミネルヴァ書房.

黒田亘 (1987). 言語論の素描. デイヴィッド・ヒューム研究. 御茶の水書房.

Earnest Campbell Mossner (1948). *Hume's Early Memoranda, 1729-1740*. Journal of the History of Ideas volume IX January-October 1948.

Earnest Campbell Mossner (1980). *The Life of David Hume, 1954, Second edition*. Oxford: Clarendon Press.

大槻春彦 (1948). 解説. デイヴィッド・ヒューム. 人性論 (一) - (四). (大槻春彦訳). 岩波書店.

大中真 (2016). 国際法史研究の起点:カーネギー国際法古典叢書目録. 一橋法学. 15(1). pp.53-68.

桜井弘木 (1971). トマス・ホッブズにおける哲学と科学について. 星薬科大学紀要. 第 13 号. pp. 25-37.

高野清弘 (1984). ホッブズとブラムホール. トマス・ホッブズ研究. 田中浩編. 御茶の水書房. pp.49-74.

田中秀夫 (2008). ガーショム・カーマイケルの自然法学. 経済論叢. 第 181 巻第 3 号. pp.206-226.

—— (2010). 若きヒュームの思想形成. 経済論叢. 第 184 巻第 1 号. pp.1-15

—— (2011). ヒュームとエディンバラ大学道徳哲学講座. 経済論叢. 第 185 巻第 4 号. pp.34-42.

田中浩 (1982). ホッブズ研究序説—近代国家論の誕生—.

—— (1998). ホッブズ. 研究社出版.

杖下隆英 (1982). ヒューム. 勁草書房.

## 註

<sup>1</sup> これら二つの革命を「イングランド革命」と呼ぶことにする。「イギリス革命」と呼ばれることがあるようだが、この時期はまだスコットランドもアイルランドも合同しておらず、言い換えれば「グレート・ブリテン王国」にもなっていない。確かに、スコットランドもピューリタン革命期に関わってはいるが、革命の原因と結果の中心はイングランドにあると言ってよいだろう。それゆえ、これら革命が生じたのが、現在日本語で使われる「イギリス」という名称がさす地域とは明らかに異なるので、ここでは「イングランド革命」と呼びたい。

<sup>2</sup> スコットランドの宗教改革は、カルヴァンの下で学んだジョン・ノックスにより始められる。

<sup>3</sup> ジェイムズ 1 世とチャールズ 1 世は、王権神授説を唱えた。また、『家父長権論 *Patriarcha*』の著者ロバート・フィルマーは、チャールズ 1 世に仕えていた。

<sup>4</sup> ホッブズがベーコンの秘書を務めた時期は、1620 年、1623 年などいくつか説がある。ベーコンは、1621 年に貴族院において弾劾され、国璽尚書の地位をはく奪されている。そのため、ホッブズが秘書を務めていたのが、ベーコンが国璽尚書の時期なのか否かが明確ではない。(例えば、田中 1998, p.254)

<sup>5</sup> 共和制政権時代でも王政復古後でも、ホッブズは批判的になるが、そのたびにあるいは批判とは独立に著作をなしていた。例えば『ビヒモス *Behemoth*』もこの時期 (1668 年頃) である。ホッブズ生存中、イ

ングランドでの評価は高まらなかったが、オランダなど海外では高評価を受けていた。

<sup>6</sup> これも 12 歳と 16 歳の説あり。いずれにしても、ホブズは兄姉とともに伯父に引き取られた。

<sup>7</sup> これによりグレート・ブリテン王国 Kingdom of Great Britain となる。

<sup>8</sup> この大学改革は、エディンバラ大学、グラスゴー大学の他では、セント・アンドルーズ大学では 1747 年に、アバディーン大学では 1754 年に行われた。

<sup>9</sup> ライデン大学やユトレヒト大学の制度になったとされる。(田中 2010, p.7)

<sup>10</sup> この事件に直接関与していないものの、これによって命が危うくなったと感じてオランダに亡命したのはジョン・ロックである。直接的にか間接的にか、スコットランドの大学改革とジョン・ロックに接点があったとみることもできる。ロックはウィリアム 3 世とともに乗船し、オランダから帰国したが、そこにはカーステアズもいたとされる。(田中 2011, p.38)

<sup>11</sup> 田中 2011, p.34

<sup>12</sup> MOL. 3

<sup>13</sup> “Voet”を田中は「ヴォエティウス」ととっているが、「ヴォエティウス」はおそらく「ボエティウス」「Boethius」を示しているのであろう。(田中 2010, p.8) しかし、この Voet は「ヴォエト」であり、オランダの法学者 Pauel Voet (1619-1677)のことであると考えられる。(福鎌／斎藤, 1985, p.168) また、ボエティウスについては初期覚書にも名が挙がっている。E. C. Mossner 編“Hume's Early Memoranda, 1729-1740”、あるいは拙訳「ヒュームの初期覚書 1729 年-1740 年 (1)」参照。  
(<https://www.toyo.ac.jp/uploaded/attachment/15433.pdf>)参照。なお、この「初期覚書」は、モスナーがヒュームの哲学的活動の「初期」に位置づけた時期に書かれたとみなしているのであるが、この「覚書」が「初期」ではなく、『人間本性論』出版以降の覚書も含まれるとする見方もある。よって、この「覚書」がなされた時期は、厳密には確定していない。

<sup>14</sup> 「キケロやウェルギリウス」を隠れ読んでいたとヒュームは言う。(MOL. 3)

<sup>15</sup> ヒューム認識論での用語法に関しては、ヒュームはロックから批判的に受け継いでおり、それゆえにロックの「観念 idea」から「印象 impression」を独立させたことが大きな違いである。ヒューム自身は「観念」という語をロックの用法から「元の意味 its original sense」に戻したとしている。(T. 1. 1. 1. n2)

<sup>16</sup> 黒田 1980, p.34-35

<sup>17</sup> T.1.1.3.1

<sup>18</sup> T.1.1.3.2

<sup>19</sup> L.1.2.2

<sup>20</sup> L.1.2.2

<sup>21</sup> L.1.2.2

<sup>22</sup> L.1.2.4

<sup>23</sup> T.1.1.3.4

<sup>24</sup> T.1.1.3.4

<sup>25</sup> T.1.1.3.4

<sup>26</sup> T.1.1.3.4

<sup>27</sup> L.1.2.4, 中略筆者

<sup>28</sup> L.1.3.2



<sup>29</sup> L.1.2.5

<sup>30</sup> Norton 2002, p.428

<sup>31</sup> 大槻 1948, p.293

<sup>32</sup> T.1.1.1.5

<sup>33</sup> T.2.3.1.10

<sup>34</sup> 田中 1998, p.95

<sup>35</sup> 田中 1998, p.103 ここでは他にロックやスミス、ベンサムなどが挙げられている。

<sup>36</sup> この点について、ホッブズも因果的決定論によって意志を抱くか否かが決定されるが、人間の行動はすべて意志による選択に基づくとする、という。ホッブズは人間を観察者と行為者とに分け、観察者の視点からは意志の自由は否定されるが、行為者の視点からは意志は自由であるとしているとされる。(高野 1984, p53) この観察者の視点と行為者の視点との見解の違いに関しても、ヒュームと類似すると見て取れるし、ヒュームもそれゆえに決定論者とみなされる。これについて議論する余地は大いにあるであろうが、紙片の制約上、別の機会に譲りたい。

キーワード：イングランド革命、スコットランド啓蒙、想像、空想、自由